（前編）

「子どもを守る条例」について　市民の皆さんにお伝えし、理解を深めていただくために、子どもの支援などに携わる方のインタビュー動画をシリーズでお届けしていきます。

インタビューシリーズ第２弾のゲストは新井肇関西外国語大学教授。

３０年間の高校教員の経験を踏まえ、生徒指導や学校カウンセリングについて研究。文部科学省のいじめ防止対策協議会の座長や児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議の委員などもされています。また、令和３年度から 枚方市のスクールソーシャルワーカースーパーバイザーとしても活動されています。

質問１、コロナ禍での子どもの現状についてどうお考えでしょうか。

昨年のコロナの中で子どもたちは大きな生活の変化を強いられましたし、ストレスも強く感じていたと思います。その結果ですね、不登校、それから自殺、これが非常に増えました。一方でいじめは、すごく減ったんです。

不登校に関しては小学生中学生合わせて２０万人近い数字です。不登校というのは年間３０日以上病気やケガによらず学校を欠席したものを言います。そういう子どもたちが全国で２０万人近くいる。これが現状です。

さらに自殺に関してはですね、499人、小学生が１０人前後、中学生が100人から150人の間、高校性が300人を超える。そのような深刻な数字を示してしまいました。

一方でいじめ、暴力行為につきましては減少した。いじめについては一昨年６１万件あったものが昨年は５１万件、１０万件近く減っているんですね。このように、いじめ・暴力行為は減った、しかし不登校・自殺という内面に関わる深刻な問題が増えてしまった、というのが昨年、コロナ禍での子どもたちの現状であるというふうに思います。

質問２、その背景についてはどうお考えでしょうか。

背景としてですね、いじめがなぜ減ったのかということから、お話したいと思います。

昨年休校期間が2か月ありました。そのあと分散登校、そしてさらに学校行事等もかなる中止になった、あるいは部活動も制限を付けられて、子どもたちがですね、直接接触する機会がというのがすごく減ったと思います。給食も黙食ですよね、みんなとしゃべらずに黙々と食べる。そういう時間が増えてしまった。いじめというのは関係性に対する攻撃なんです、ですから、関係性が密接でなければいじめというのはある意味起こりにくい。それが減少という状況になって表れたんだと思います。じゃあそのことは良いことなのか？少し疑問があるんですね。子どもたちは子ども同士で繋がり、時にはぶつかったりしながら集団の中で成長していきます。その成長の機会を失ってしまった、そのことがいじめの減少ということにも繋がっていると考えると、手放しでは喜べない。そういう状況があろうかなと思います。

一方で不登校と自殺が非常に増えてしまった。背景に何があるんだろうか。不登校に関して言うと、ここ数年一貫して増えてきてるんです。もしかすると学校が子どもたちを引き付ける力を失っているもかもしれない、また、家庭が学校へ押し出す力を弱めてしまったのかもしれない。学校に行けばいいことがある、学校で一生懸命頑張れば未来が開けていく、というような学校が持っている力というのが、少し弱くなってしまったんじゃないか、ということを感じます。

自殺についてはですね、499人という数字、１日に２人以上の子が自ら命を絶っているという現状があったわけです。自殺のキーワードは「孤立」なんです。人と人との絆が失われて、孤立を感じた時に人は苦しくなる。そしてそこに耐え切れないようなストレスを生む事象が起きる、そうすると、場合によると、極めて稀ですけれども、自ら命を絶つというような現象が起きてしまう。コロナ禍で非常に社会不安が広がりました。そして人と人との接触が失われていった。そういう中で自分の居場所というのを失ってしまった子どもたちが少なくなかったんじゃないか。家庭に居場所がなければ学校で友達と先生と触れ合うことで居場所ができる。学校で居場所がなければ家で。しかしコロナ禍で家の生活というのも随分変わった。そうすると、どこにも居場所のなくなった子どもたちが、もしかすると孤立感を強めて、最悪の場合自ら命を絶つというような状況に至ってしまったのではないか。そんな風に思っています。

質問３、自殺が増えていることについてどんな対策がありますか。

　先ほど申しましたように、自殺のキーワードは「孤立」なんですよね。自殺予防のキーワードは「絆」です。ですから、子どもたちを孤立させないように、子どもたち同士の関係もありますけれども、大人が、できるだけ多くの大人が子どもたちに関わって、繋がりを作っていくということがとても大事だと思います。ですからできるだけ多くの大人が子どもに関わって、そして子どもたちが困ったときに、「助けて」って言えるようなチャンネルをたくさん用意しておくということがひとつ大事かなと思います。

後はですね、学校という立場で考えたときに、「自殺予防教育を推進するように」ということが、2016年の自殺基本法の改正、翌年の自殺総合対策大綱の閣議決定の中で、努力義務として示されました。それで学校は、小学校から高校まで、それぞれの発達段階に応じてですけれども、未来を生き抜く教育として自殺予防教育を進めていこうということにいま取り組んでいます。

特に、自殺の多い高校生。背景にうつがあるケースがかなりあるんです。大人の自殺を減らしてきた背策の眼目は中高年のうつ病対策です。高校生に関しては、保健の授業で心の病に関する授業をし、自分も周りも、そして周りの大人も子どもの心の状態に気づく、気づいたら適切な関わりをし、場合によったら医療に繋ぐというようなことも対策として必要かもしれません。

小学生中学生に関しては、人間関係ですとか、あるいは進路ですとか、勉強がよく分からないとか、様々な要因が絡んできます。家庭の要因もかなりあります。ですから、子どもたちが孤立しないように、そして苦しいときに助けてって言えるような回路を作る。そして助ってって言いたくなるような存在にわたしたち大人がなっていくということが一番大きな対策になるんじゃないか、そんな風に思います。

質問４、いじめについて現在特徴的なことや注意すべきことはありますか

いじめの全体の件数は先ほど申しましたように１０万件近く減ったわけです。ところが、SNSを介したいじめ、ネットの中で、あるいはスマホを使って、というようなものは実はかなり増えてる。リアルな場面でのいじめだけではなくて、バーチャルな世界でのいじめというのが子どもたちの間で広がっている。小学生でもかなりスマホを持つようになってきました。中学生は９割くらい持っています。そうするとこれまでは、実際に顔を合わせたところで嫌なことを言われたりされたり、あるいは暴力を受けたり、家に帰って接触がなければその状態から離れられた。つまりいじめのオンとオフがあった。でも今は家に帰ってきて直接の繋がりがなくっても、ある意味SNSでいじめが追っかけてくる。自分の知らないところでいろんな情報が流されてるかもしれない。このことはとても難しいことだと思います。大人から見えにくい、そして子どももなかなかSNSで起こっている事を言わない。ですから、子どもたちにどのようにスマホとタブレットを使って、ネットとあるいはゲームと、バーチャルな世界での付き合い方ですね、道具との付き合い方。その道具を通じての人間同士の付き合い方、これをしっかりと学ぶ必要があるんじゃないか。もう、スマホですとか、パソコンですとか、これからギガスクール構想、一人一台端末を持つという状況でICT教育が進んでいるわけです。世の中も、もうパソコン、ネットなしには動かない。その中でどう付き合っていくか。そのことがいじめ対策含めてとっても大事になってくる。そういう意味で、わたしたち大人もですね、子どもと同じかそれ以上に、ツールについて、あるいはネット社会で起きていることについて、学んでいくという必要があるんではないか。子どもと大人が一緒に学び合って、新たな形のいじめを防いでいく、このこともとても大事なことだと思います。

質問５、不登校増加について今後ひきこもり状態に繋がる懸念がありますがどうお考えですか。

不登校の児童生徒の２割が長期化しているというふうなデータがあります。で、引きこもり調査を内閣府がしていますよね、全国で、推定値ですけれども、15歳から39歳、54万人の引きこもりの方がいるという数字が出ている。そのきっかけの一番大きいのは、不登校なんです。2016年に教育機会確保法ができて、不登校の支援の目標は、学校復帰だけではない、休むときは休むことも必要だ、最終的に社会的自立を果たすことが目標なんだと、そして、不登校というのは指導の対象ではなく支援の対象なんだと。それで、教育委員会にあります、適応指導教室と言われていたものも、教育支援センターと呼ぼうというふうに、不登校に対する認識が変わってきました。さらにコロナでですね、学校に行かなくてもいいという状況が出てきた、そのことが先ほど申しましたように、学校の引き付ける魅力、家庭が学校に押し出す力、これが弱くなっている、そのことと相まって不登校を急激に増やしてきているんじゃないかというふうに思っています。

学校復帰を目指さないというのはある意味、当然なんだけれども、じゃあ不登校状態になったときに何も関わらなくていいのかということではないですよね。

わたくしが調査をしたときに、子どもが学校に戻れた一番大きなきっかけは何か、先生の関わりだって言ってるんです。適切なタイミングで、適切な距離で、子どもたちの状況に応じて学校の先生が関わっていく、学校だけじゃなくて、教育支援センターの指導員さんが関わっていく、スクールカウンセラーが関わっていく、あるいは親が、場合によればボランティアの大学生が関わっていく、そういう中で子どもたちにエネルギーがうまれて、学校に戻るということもできた。ですから学校復帰を目的とはしないんだけれども、社会的自立につなげていくためにも、「関わる」ということがとても大切なことだというふうに思います。

社会的自立っていうのが一体何かっていうのが非常に分かりにくいところがある。自立するっていったい何なんだろうなって。一人でなんでもやるっていうことなのか。そうではなくて、自分の苦しいことや辛いことがあったときに、人に頼ってでもそこを乗り越えていく、そういうことなのかなって思うんですよ。で、その結果、５年、最悪１０年、遠回りをしても、自分の夢や希望を少しでも実現できればいいのかなって。

わたしが知っている学生でですね、今はもう教員になっているんですけども、中二から高校３年生まで、ほぼ全欠。高校入試でなんとか高校に入ってここでリセットして頑張ろうと思ったんだけれども結局３日しか行けなかった。何が原因かって自分でもよくわからない。でも学校に行かないっていう状態を続けているうちに、昼夜逆転が起きたり、あるいは生活リズムが崩れたり、あるいは学校に行っていないっていう状態が自分にとって当たり前になってしまった。それで、今言ったような中二から高三までずっと不登校だった、その子が教員を目指して、大学入学検定試験を受けて、教育学部に入って、先生になるんですよね。で、今も１０年くらい経ちますけれども、先生をやっている。その子がなぜ不登校なのに教員を目指したのか。ひとつは、中学校の時の先生が、ずっと関わり続けてくれた。それで、教員の仕事っていうことを大事に思った。また、自分が学校に行けなかったということを逆の経験にして、そういう子が一人でも少なくなるように自分のやれることをやりたい、そんな思いで教員を目指した。そんな学生もいました。

質問６、「社会的自立」についてもう少し詳しく教えてください。

社会的自立。その子にとっては、5年近くの間が遠回りだったんだけれども、自分のやってみたい、そして自分の生きがいになるような仕事に就けた。そういう意味では、社会的自立が果たせた。でもその自立に向かっていくっていう中で、先生の関わり、あるいは家族の支援、あるいは専門機関との連携というようなものが支えていったんじゃないか。だから、「支えられることを受け入れることができる」っていうことが、自立なのかなぁと思ったりします。

（後編）

子どもを守る条例は、医療・健康・福祉・教育などの各分野と連携して行う総合的支援、市・保護者・学校園等・地域住民・事業者などと連携して行う重層的支援、出生から成人まで継続して見守る継続的支援を基本方針としています。

質問７、教育現場での経験から各分野と連携していくことの重要性についてどう思いますか。

はい。わたくし高校の教員を30年やってました。教員になって間もない頃に、一人の子を担任したんですけれども、非常に難しい子だった。不登校気味ですね、気が向いた時だけに学校に来る、そして気に入らないことがあると場合によっては先生に反抗したり、あるいは物に当たったりして、ぷいっと帰ってしまう。家でも、家庭内暴力等があって非常に難しい困難を抱えていた。結果的にですね、親が家から出すような形で下宿をさせてしまったんです。しかし学校としては、彼を応援していこうということで、わたしは担任として、彼にある意味関わり続けた。アパートに夜訪ねて話をしたり、学校に来ないときには迎えに行ったりと、そこまでやる必要があったのか、今思うと立ち入りすぎて関わりすぎたなと思うところもあるんですけども、そんな関わり方をしました。それで、中々好転しなかった。どうやっていいか、ほんとにこう自分でも手探りで、周りの先生たちがですね、わたしを支えてくれたので、わたしは若いということもあって、彼に非常に関わっていったんです。手探り状態の中でどうしたらいいかと思って、大学時代の友人でカウンセラーをしているものに相談しました。当時はスクールカウンセラーというものがまだ存在していない状況でした。彼から、さまざま、これは電話でのやりとりでしたけれども、コンサルテーションを受けて関わっていった。そして、たまたまその高校の卒業生で精神科医をやっている方が相談に乗ってくれて、医療的な側面からもその子の問題を考えてくれた。

　わたしひとりが闇雲に彼に関わっていっていたら多分、何もできなかったかもしれない。でも、周りの先生に支えられ、そして、カウンセラー、それから精神科医といった方に専門的な見地から色々な情報を得たりして、なんとか彼に関わっていくことが出来た。

少し病理的な診断も出ました。でも彼が繋がっているのは学校なので、連携を取るから学校に行かせてくれ、学校を続けさせてくれというのが医療からの見解でしたので、学校としてもそれを受け入れて、学校にできるだけ登校できるようにということで応援していった。最終的にはですね、他の生徒よりも少し遅れてですけども、卒業することができました。

　あの時のことを振り返ると、一人の教員がいくらシャカリキになって頑張っても、やれることには限界がある。周りの助けっていうのがどれだけ大事だったかっていうのを痛感するんですね。そう思うと今は、スクールカウンセラーがいます。スクールソーシャルワーカーもいます。スクールロイヤーもいます。そして学校の中でも、組織的な体制が整いつつある。だから教育以外の専門家の知恵や力を借りない手はない。それを活用して、子どもの最善をみんなの知恵と力を合わせて考えていく。そういう体制が整いつつある。それをなんとか、仏作って魂入れずじゃなくて魂をしっかり入れてですね、一人一人の子どもの応援ができるようになっていけばいいなと思っています。

質問８、各分野が連携する体制が整ってきていますが、なにか課題はありますでしょうか。

　そうですね、ケース会議などでですね、様々な分野の人が集まる。最初やっぱりぎくしゃくするんですよ。それは、お互いがお互いの専門性をどれだけよく理解しているか。何ができるか、何ができないか、ということをお互いにちゃんと理解する。その専門性の固有性と限界をお互いが分かり合って、その上で力を合わせていく。力を合わせていくためにわたしは、お互いがお互いを知らないとなかなかできない、よく知っているひとだったら協力できる、つまり、ことが起きる前に、顔が見える関係性をどれだけ、教育の専門家、心理、福祉、医療の専門家、法律の専門家と作ってあるか、顔の見える関係性があるかってことがとても大きいような気がします。

　それからですね、今言ったような専門家が一堂に会して、ひとつの問題を巡ってケース会議をする。時間の調整もいるでしょう、日程合わせて。そして時間的なゆとりと同時に、心のゆとりもなければなかなかじっくりとケース会議も持てない。そういう意味で、時間を確保する、なかなか難しいんだけれども、マンパワー、ヒューマンパワーを確保して、時間を確保して、ほんとは一人一人の子どもにじっくりとみんなの知恵と力を合わせて関われる、そういう体制ができるといいなぁって。それができないと、絵にかいた餅に終わってしまう。ですから、顔が見える関係をつくり、お互いの専門性をリスペクトしながら、子どもにとっての最善を目指す。そしてそのような時間と機会を確保できるように体制整備をしていく。そのことがこれから課題を克服していくうえで、とても大事なことだっていうふうに思っています。

質問９、保護者と学校との関係性についてどうお考えですか。

今いろんな専門家がいると言いましたよね。保護者も、自分の子どもの子育てっていう意味で言えば、その専門家なんですよ。ですから、学校・教員と保護者っていうのを対立関係で捉えるんでなくて、子どもを巡るパートナー。お互い、家で、学校で、それぞれの持ち場で専門性を活かしながら子どもに関わっていくパートナーなんだ。子どもはわたしは学校だけで育つものではない、家だけで育つものではない、学校と家で、そしてさらには地域で子どもを育てていく。そういう意味で大人がですね、子どもの問題を巡ってパートナーシップをつくっていく、そのことが一番大事じゃないか。

　こんなこともありました。学校で成績が落ちてる。でも徐々に落ちてる。そうすると学校は家庭に連絡をしないですよね、まずね。例えば100点だったのが10点0点になったなら何かあったんじゃないかと思う。でも100点が80点、80点が60点、徐々に下がっていくとあまり気にならない。家の方も、その子の生活を見ていて、トイレにこもっている時間が今まで５分10分だったのが、20分30分こもっていることがある、おかしいなぁ。でもそれ多分学校に連絡しないですよね。しなかったんです、お互いに。そしたらその子は非常に危機的な状況に陥りました。もしもあのとき気楽に学校のほうから「ちょっと成績が落ちてて心配なんだけれども」、親のほうから「ちょっとうちの子のトイレがすごく長くなっているんだけれども学校で何かなかったでしょうか」というふうに、両方の懸念、これを情報として突き合せたらもしかしたらその子の困っていることを助けることができたかもしれない。そんな風に、保護者が持っている情報、学校が持っている情報を重ね合わせて、その子にとって何が最善かということを目指していく。ちょっと気になることがあったら、お互い気軽に連絡取り合う、そういう関係ができればいいなと思います。

質問１０、子どもは成長に合わせて生活環境を変えていきます。継続して子どもを見守るうえで重要なことはありますか

　子どもを守る条例では、複雑な子どもの課題の背景を踏まえて、いまおっしゃっていただいたような保護者、地域、学校、事業者ですね、多様な主体が連携して、重層的な支援を行っていくことというのも基本方針にしています。そういう意味でも、学校と保護者、地域、連携していくことが大切なのかなと思います。

　これまで学校の話をしていただきましたが、時間軸で考えた時に、子どもは保育園、幼稚園などから小学校、中学校、高校生と成長に合わせて環境を変えていかなければなりません。子どもの環境が変わっても、届ける支援は継続していかなければならないという考えも、条例の基本方針としているのですが、継続して見守るうえで重要なことはありますでしょうか。

そうですね、子どもの危機っていうのを見ていくと、環境が変わるところっていうのは大きな危機に見舞われる危険性がある。ですから、小学校に入った一年生のときに学校生活に戸惑う、これを「小一プロブレム」というふうに言うことがあります。

そして次に小学校から中学校ですね。ずっと同じ先生が教室にいて、学級担任制でやってきたのが中学校になって教科担任制に変わる。勉強も難しくなる。定期試験もある。部活も始まる。その環境移行期で適応が難しい子たちが出てくる。これを「中一ギャップ」って言います。そして高校に行くか就職するか、高校に入る年代のところも大きな岐路ですよね。

その節目節目が、どうしても不適応を起こしやすい、危機に落ちやすい。だからそこをしっかりと支援していく必要がある。ということは、保育園や幼稚園から小学校、小学校から中学校、中学から高校というのはかなり地域的に分散してしまうので難しいんだけれども、中学から高校へ、場合によれば就労した事業所へ、その子の成育歴を辿りながら、伝えておくべきことを伝えておく。その子にとって大事な情報を、伝え、受け継ぎ、伝え、受け継ぎっていうことをまずは園・学校間の連携の中で進めていくってことが大事かなと思います。

そのときにですね、どうしても問題を伝えたくなってしまう。問題点を。問題点だけではなくて、その子のいいところ。いいところが見えればアプローチがやりやすくなる。ですから、こんな力があるんだ、こんないいところがあるんだっていうこともぜひ引き継いでいってほしい。そしてさらに引継ぎのひとつのスキルとして、「事実は何か」「先生が主観的に思っていることは何か」、事実と先生が思っていること、これをしっかりと分けて情報として伝えていくっていうことも大事なんじゃないかなと思います。そして、そのことをセキュリティをしっかりと守りながら記録していく。記録としてつなげていく。そのことを次の対応に活かしていくということが必要かなと思います。

最後に、教育者としての立場から、「子どもを守る」とはどういうことかお話いただけますでしょうか。

そうですね、子どもを守る、「守る」、大人の務めかもしれない。でも「守る」っていうと、なにかこう包み込んでしまって、子どもの主体性っていうのを、少し弱めてしまうような気もする。「守る」って、子どもが主体的に動ける範囲や内容を広げるように応援していくことかなぁと思うんです。

わたしは生徒指導論が専門なんです。生徒指導っていうのは、なにかね、ちょっと強面の先生が厳しく叱ったり校門で遅刻を注意したり、服装指導をしたりっていうイメージがあるんだけれども、生徒指導っていうのはそれだけじゃないんですね。

もともとはアメリカのスクールカウンセリングが日本に入ってきて生徒指導と名づけられました。guidance and counseling 、guidance（ガイダンス）＝「望ましい姿に子どもを導く」、それとcounseling（カウンセリング）＝相談ですね、子どもと一緒に考えていく。ガイダンスとカウンセリングがいっしょになって、「生徒指導」なんです。

　ですから生徒指導の目指すところは、大きく言うと二つの局面があります。ひとつは、その子が持っている可能性、夢や希望、これを実現していくように応援する。「個性化」っていうことですね、「個性化」への支援です。そしてもうひとつは、その子が社会の中で生きていく、社会性を身に着けていく。消極的な意味で言えば、法律を守ったり税金を納めたりできるように、積極的な意味で言えば、社会参画して、理不尽な社会だったらみんなが幸せになれるような社会をつくっていく、そのために声をあげたり動いたりする。「社会化」っていうことです。この「個性化」と「社会化」を一人の個人の中で充実させていく。そのための応援をしていくのが「生徒指導」だってわたしは思っています。

ですから、生徒指導を通じて子どもが大人になっていく過程で“Wellbeing”＝「身体的にも、身体も健康で良好な状態、精神的にも健康で良好な状態、そして社会的にも、人間関係が良好で、そして充実して生きられるような状態」、“Wellbeing”を実現していくように子どもに働きかけていく。これが「生徒指導」、そしてそのことが「子どもを守る」っていうことなのかなと思います。

で、社会的自立のところで少し触れましたけれども、「自立」って何なんだろうなって思うんですよ。大人になるって自立することだって言いますよね。じゃあ「自立」って何なんだろう。一人でなんでもやること？なのかな。じゃぁ自分を振り返ったときにひとりでどれだけのことがやれてるか。人に頼りっぱなしですよ。みんなの力を借りて、なんとかやってる。でも大人になると、だんだんとネットワークが広がっていく、人間関係の。そして、どう、誰にどんなふうに頼ればいいのかって分かってくる。もしかすると大人になるって、「適切に依存できるようになる」ことなのかなって思うんです。自立と依存は対立概念じゃない。人にうまく依存し、頼って、それは信頼ってことだと思うんです。そうすることで、自分ができることがだんだん広がっていく。だから適切に依存して、自分のやれることをどんどん広げてく。そのためには私たち大人が、子どもが安心して信頼して依存する、頼れる存在にならなければならない。ですから、子どもを守る私たちが、子どもが困ったときに頼って信頼して相談してこれるような、そんな存在になっていく。そしてそういう関係性が子どもと大人の中に生まれていけば、きっと子どもを守るってことができるようになるのかな、そんな風に思っています。